地方官衙創設期における瓦葺建物の検討
—勝間田遺跡・平遺跡出土瓦の分析を通して—

大　橋　泰　夫*

Architectural “Grand” Styles of the Government Offices in the 7-9 th-century : On the Okayama-Katumada Site and Taira Site

Yasuo OHASHI

キーワード：古代地方官衙、瓦葺建物

はじめに

岡山県勝田郡勝央町に所在する勝間田遺跡・平遺跡は、大型建物跡や瓦・墨書土器などの遺物から「美作国勝田郡衙」とその関連遺跡として知られてきた。なかでも官衙域から白鳳様式の瓦が出土し、地方官衙の瓦葺建物の古い採用例の一つとして注目されてきた。筆者も地方官衙創設期における瓦葺建物の検討にあたって、勝間田遺跡を地方官衙のなかでもっとも古い時期に瓦葺建物を用いた例として取り上げた（大橋 2010）。しかし、勝間田遺跡については隣接する平遺跡との関係や出土瓦について不明な点が多く、十分な検討ができなかった。その要因の一つは昭和 40 年代の古い調査で、遺構や瓦類を含めた遺物について不明な点が多いためである。そこで改めて、勝間田遺跡・平遺跡出土瓦の分析を通して実態を検討することにした。

古代における地方官衙は行政施設であり、地方支配を行う上で可視的な権威誇示も大きな役割を持っていた。地方官衙における瓦葺建物は律令支配の道具の一つとして、宮都の荘厳化と連動し、律令国家の威信を示し地方支配を支えるためにあった。そのために、地方官衙創設期を考える上で重要である勝間田遺跡・平遺跡を取り上げた。

Ⅰ　勝間田・平遺跡の概要

勝間田遺跡・平遺跡は岡山県勝田郡勝央町勝間田と平に所在する。両遺跡は南北に浅い谷を挟んで、吉野川の支流滝川右岸の段丘面から丘陵上にかけて立地し、その南側には古

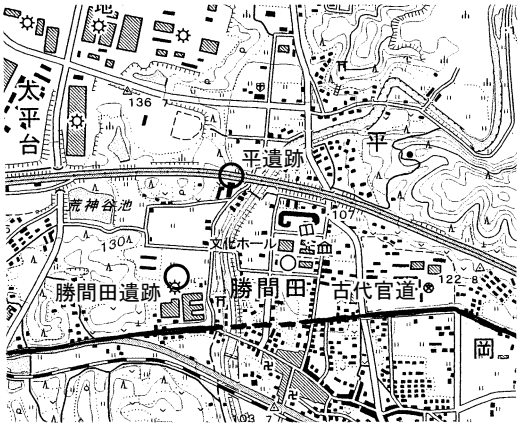

図１　遺跡の位置（1/25,000）

*島根大学法文学部

代官道が通ると推定されている（図1）。

勝間田遺跡は1973年に圃場整備工事に伴い、岡山県教育委員会により範囲確認調査が実施され、4棟の掘立柱建物、溝5条、礎石1基が確認され遺跡の一部が盛土により保存された（図2、岡山県教育委員会1974）。報告では溝2条から築地塀を想定し、その溝から瓦が多量に出土したとされる。他に礎石が一つみつかっており、「建物2の東南端にあり、礎石の掘り方が建物2の掘り方を切っている。大きさは一辺約1mに方形」とされる。この点から、掘立柱建物の後に礎石建物に建て替えられたとみられるが、遺構の変遷案は示されていない。遺物では瓦が多く、須恵器、陶硯も出土している。瓦については、軒丸瓦を2類に分け1類を白鳳期に比定した。

平遺跡は勝間田遺跡の200m北側に位置し、1972・1973年に中国自動車道建設に伴い発掘調査された（岡山県教委1975）。遺構は古代から中世までわたる。主体は奈良時代末から平安時代初期にかけての掘立柱建物群で、掘立柱建物7棟、礎石建物、溝、鍛冶炉8基などが確認された。多量の瓦、土器、陶硯が出土しているが、瓦葺建物はみつかっていない。平遺跡の報告では、勝間田遺跡について「平遺跡に南接して所在する遺跡で、蓮華文鐙瓦（奈良前期）、礎石、円面硯等が出土しており、蓮華文鐙瓦に先行する時期の掘立柱の建物群が知られている。また、この遺跡は、寺院址もしくは、官衙址と推定される」とされた（岡山県教育委員会1975）。この時点では、勝間田遺跡について官衙と断定しておらず、寺院の可能性も想定されていた。

その後、河本清・岡田博氏が両遺跡の遺構を整理し、勝田郡衙の中心施設とされた（河本・岡田1979）。勝間田遺跡について3期の変遷を示し、第1期は建物2と4、第2期に建物1と3が直交して配置されたと考え、東西建物の中心軸から反転させて方1町からなるコ字形の建物配置を想定し、建物配置から勝間田遺跡を勝田郡衙と推定した。その後に3期として築地遺構をあて、礎石建物が掘立柱建物に後出するとした。瓦については、軒丸瓦2種を奈良時代前期に比定した。一方、平遺跡は建物規模が勝間田遺跡よりも小規模で、その配置も斉一性が認められない点に特徴があるとし、倉風の1×1間、2×2間の建物、多量の瓦や「郡」刻印土器や「勝」「厨」墨書土器から、勝田郡衙である勝間田遺跡と一体をなす遺跡と評価した。ここで整理された点が勝間田遺跡、平遺跡の基本的な評価として現在まで概ね支持されてきた（河本1986、團2009他）。また、岡田氏は勝間田遺跡について、瓦が多量に出土する点から駅家の可能性も指摘した（岡田1992-434頁）。

その後、山中氏は勝間田遺跡について遺構変遷等を検討し、「白鳳様式の瓦は、掘立柱建物の一部、あるいは掘立柱建物と併存した未

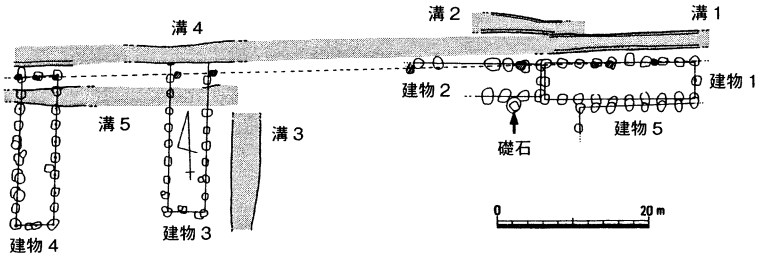

図2　勝間田遺跡の遺構配置図

確認の礎石建物に葺かれていたものである可能性もある。したがって、本遺跡の創建も7世紀後半期から8世紀初め頃に下るのではなかろうか」とし、平遺跡については「平・勝間田遺跡例では、遺跡地内に「尾堂」の字名が残ることや瓦が出土することから、評衙・郡衙の一郭またはそれに接近して仏教寺院が存在した」と想定する（山中1994）。さらに、いわき市根岸遺跡（陸奥国磐城郡衙）を評価するなかで、勝間田遺跡出土瓦を創設期の郡衙施設に用いられたとした（山中2000）。

筆者も基本的には山中氏が示したように、両遺跡は瓦や土器類からみて7世紀後半から8世紀初め頃に成立したと考える。瓦が葺かれた建物についても、山中氏と同じく勝間田遺跡出土瓦について郡衙創設期の例とみたが、勝間田遺跡や平遺跡出土瓦については分析を行っていないために十分に検討ができなかった（大橋2010）。

以上のように先行研究によれば、勝間田遺跡は勝田郡衙（郡庁）となり、平遺跡では堂宇そのものはみつかっていないが付近に寺院を想定するのが妥当であろう。

Ⅱ　瓦の分析

勝間田遺跡・平遺跡を検討する上で問題点の一つは、勝間田遺跡や平遺跡で瓦が多量に出土したとされるが、古い時期の緊急調査であったために実態が不明となっている点である。勝間田遺跡では軒丸瓦しか報告されておらず、平瓦や丸瓦についてはわからないなど、地方官衙創設期における瓦葺建物の採用を考える上で重要な遺跡であるにもかかわらず不明な点が多い。ここでは両遺跡出土瓦について軒先瓦だけでなくすべての平瓦・丸瓦について分析し、瓦葺建物の年代や屋根景観を明らかにするために検討を行った。軒先瓦、平瓦、丸瓦の分類を行い、平瓦・丸瓦については隅数から個体数を算出した。本来、瓦の個体数を算出するためには、隅数算出法だけでなく重量算出法など複数の算出法を用いるべきだが、ここでは隅数算出法だけを用いた[1]。

1　勝間田遺跡の分析

(1) 瓦の組合せと年代

勝間田遺跡から軒丸瓦は2種出土し、1類は7葉複弁蓮華文（蓮子1＋8）で笵傷が明瞭に残る（図5）。2類も7葉複弁蓮華文で蓮子が1＋6となる。量は破片数で1類が5点、2類が7点となり、個体識別で個体数をみても2類が多い（表1）。1類は弁が盛り上がり、圏線が細い点から2類より型式からみると古い。2類も文様が1類によく似ている点から、1・2類ともほぼ同時期の創建瓦とみておく。1類は、川原寺式軒丸瓦の系譜下にあり「美作7複弁蓮華文軒丸瓦」と呼ばれ、楢原廃寺をはじめ同笵・同文例が広がる（湊1992、湊・亀田2006、亀田2009）。湊氏は勝間田遺跡の軒丸瓦1類を楢原廃寺1A型式の系譜を引くとみなし、年代を白鳳後期（694年～710年）におく（湊1992・2006）。

平瓦は桶巻作りが主体を占め、一枚作りはごく少量だけである（表1）。粘土板桶巻作りの平瓦は凸面ナデをなで整形するものがもっとも多く、他に正格子叩き（3種）、斜格子叩きがあり、いずれも広端部の隅をわずかに切り落とす特徴を持つ点で共通する。こうした桶巻作り平瓦が軒丸瓦1・2類や量が多い無段式の丸瓦と組み、創建瓦となる。全体に焼成がよいものが多い。

一枚作りの平瓦は少量あり、一点だけ有段式丸瓦も出土しており、こうした瓦が8世紀後半以降の補修瓦と想定できる。組む軒丸瓦は出土していない。焼成は甘いものが多い。

(2) 勝間田遺跡の瓦葺建物

報告によれば、築地塀の両側溝から多量の瓦が出土したとされる（岡山県教育委員会1974)。現在、勝央町教育委員会で保管されている瓦類は破片数で500点ほどであり、その多くは遺構外のもので包含層や出土地区不明であった。築地塀の両側溝を含めて溝出土の瓦は、平瓦でみて総破片数327点中の80点、隅数でみても総隅数51のなかで11であった。丸瓦165点については27点が溝出土であり、軒丸瓦14点も1点だけ「中段」出土とわかる。瓦の多くは包含層など遺構外が主体となっており、現状では瓦が用いられた建物は特定できない。

(3) 屋根景観の復元

勝間田遺跡出土瓦の特徴は、軒平瓦が出土していない点である。破片数でみると、軒丸瓦14点、平瓦327点、丸瓦165点で、軒平瓦は出土していない（表1)。平瓦と丸瓦の個体数を隅数から算出すると、平瓦13.25、丸瓦11.75となる。一方、軒丸瓦は瓦当でみるとほぼ完存するものが4点と多く、個体識別でみると9個体となる。

したがって、勝間田遺跡の軒先瓦、平瓦、丸瓦の量（個体数）は下記の通りとなる。

・軒丸瓦9、軒平瓦0、平瓦13.25、丸瓦11.75

一見すると、平瓦に対して丸瓦の数がほぼ同じとなり、通常の総瓦葺建物のあり方に比べて多い。ただし、丸瓦の隅数47点中、広端部7に対して狭端部24となり、極端に狭端部の隅数が多い。これは丸瓦狭端部に軒丸瓦の丸瓦部が多く含まれていることを示すのであろう。平瓦と丸瓦の数量はほぼ同数、出土しているが、丸瓦破片には軒丸瓦の丸瓦部も多く含まれているとみられる点、平瓦・丸瓦の数量に比べて軒丸瓦の比率がきわめて高い点からみて、軒平瓦を用いない甍棟だったと推定できる。

その他に、磚とみられる破片が2点出土している（図3)。厚さは約10cmで焼成はよく灰色を呈する。瓦と胎土・焼成は大きく変わらない。

小結

検討の結果、勝間田遺跡で瓦を葺いた建物は特定できないが、軒平瓦を用いない甍棟だったと推定できる。磚が2点出土しており、瓦葺建物に磚を用いた可能性が考えられる。磚を用いた瓦葺建物としては中心施設である郡庁（建物1・2か）を候補の一つとみておきたい。

2　平遺跡の分析

(1) 平遺跡の瓦葺建物

平遺跡でも瓦葺建物は特定できないが、勝間田遺跡より瓦の出土量は多い。勝間田遺跡との違いは、奈良時代後半の軒丸瓦・均整唐

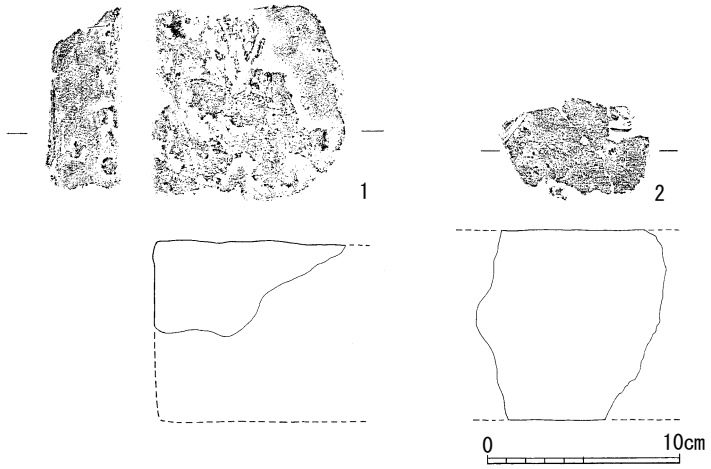

図3　勝間田遺跡出土の磚

表 1　勝間田遺跡出土の瓦集計

軒丸瓦

種類	破片数	備考
7 葉複弁蓮華文	5	瓦当完存 1、個体識別では 3 個体
8 葉複弁蓮華文	7	瓦当完存 3、個体識別では 6 個体
種類不明	2	

＊他に軒丸瓦の丸瓦部破片 5 点

平瓦

種類	特徴	破片数	隅数	個体数	備考
桶巻作り	凸面ナデ	147	26	6.5	
	正格子叩き	105	21	5.25	3 種（大・小、やや長方形）
	斜格子叩き	26	5	1	細かな斜格子
一枚作り	縄叩き	45	1	0.25	
	平行叩き	3	1	0.25	
	変形平行叩き	1	0		平行叩きに×状に線
		327	54	13.25	

丸瓦

種類	破片数	隅数	個体数	備考
無段	163	47	11.75	狭端部 24、広端部 7 、狭端部・広端部不明 16
有段	2	0		

備考：他に種類不明の瓦 21 点

表 2　平遺跡出土の瓦集計

軒丸瓦

種類	破片数	備考
7 葉複弁蓮華文	4	
8 葉複弁蓮華文	7	
13 葉単弁蓮華文	25	瓦当完存 3

＊他に軒丸瓦の丸瓦部破片 9 点

軒平瓦

種類	破片数	備考
ヘラ書き	2	
均整唐草文	21	隅切軒平瓦 2 点含む

平瓦

種類	特徴	破片数	隅数	個体数	備考
桶巻作り	凸面ナデ	626	82	20.5	勝間田遺跡でも出土
	正格子叩き	390	95	23.75	勝間田遺跡例と同一か
	斜格子叩き（小）	45	4	1	勝間田遺跡でも出土
	斜格子叩き（大）	16	5	1.25	勝間田遺跡では未出土
一枚作り	縄叩き	318	42	10.5	
	平行叩き	274	31	7.75	
	変形平行叩き	12	4	3	勝間田遺跡と同一
	計	1681	263	67.75	

丸瓦

種類	破片数	隅数	個体数	備考
無段	390	70	17.5	狭端部 35、広端部 28、狭端部・広端部不明 7
有段	23	12	3	
計	413	82	20.5	

備考：他に種類不明の瓦 384 点

表 3　勝間田遺跡・平遺跡出土瓦の組合せ

年代	軒丸瓦	軒平瓦	平瓦	丸瓦	勝間田遺跡	平遺跡
7 世紀末～8 世紀初	7 葉複弁蓮華文（蓮子 1+8） 7 葉複弁蓮華文（蓮子 1+6）	平瓦広端面に沈線	桶巻作り 桶巻作り	無段式	○ ○	○ ×
8 世紀後半	8 葉および 13 複弁蓮華文	均整唐草文	一枚作り	無段式、有段式	△（平 瓦・丸瓦のみ）	○

草文の軒平瓦が出土する点と、平瓦と丸瓦の比率である。破片数で軒丸瓦36点、軒平瓦23、平瓦1681点、丸瓦413点が出土する（表2）。軒先瓦（破片数）、平瓦、丸瓦の量（個体数）は、平瓦と丸瓦の個体数を隅数から算出すると、平瓦67.75個体、丸瓦20.5個体となる。

平瓦と丸瓦の数量はほぼ3.3：1で、一般的な総瓦葺建物に比べてやや平瓦の比率が高く、軒先瓦も平瓦・丸瓦に比べて少なく、隅切軒平瓦（図4-2）から総瓦葺きの瓦葺建物があったことがわかる。

(2) 瓦の組合せと年代

平遺跡からは軒丸瓦3種、軒平瓦2種が出土している（図5）。創建瓦と奈良時代後半の瓦に分けることができる。

創建期（7世紀末から8世紀初頭）の瓦は1類・7葉複弁蓮華文軒丸瓦（蓮子1＋8）で、勝間田遺跡と同笵で笵傷進行の違いもない。今回の調査で、軒丸瓦1類と組む平瓦の広端面にヘラで深く沈線を引いた軒平瓦を2点確認した[2]（図4-1）。桶巻作りで、胎土・焼成・色調も7葉複弁蓮華文軒丸瓦と同一である。

平瓦は桶巻作りで凸面ナデ、正格子叩き（3種）、斜格子叩きのものがあり、いずれも広端部を焼成前に隅を削り落とすという特徴で共通する。丸瓦は無段式が組む（表3）。創建瓦は勝間田遺跡と同じく焼成がよいものが多い。

奈良時代後半の軒先瓦は、平遺跡2類・8葉複弁蓮華文軒丸瓦と平遺跡3類・13葉単弁蓮華文軒丸瓦、それらと組む均整唐草文軒平瓦である（図5）。2類・8葉複弁蓮華文軒丸瓦は笵傷が明瞭で、かなり傷んだ笵を使っている。報告では均整唐草文軒平瓦を2種に分けるが、小さい破片も多く明確に分類できなかった。合わせて21点出土している。均整唐草文軒平瓦は焼成がやや甘いものが多く凸面に平行叩きを残す。この8世紀後半の軒先瓦と組むのは一枚作り平瓦と有段式丸瓦である。なお、有段式丸瓦の量が少ない点から、無段式丸瓦には8世紀後半のものもあるとみられる。

このように1類・7葉複弁蓮華文軒丸瓦が創建瓦となり、勝間田遺跡と同笵で7世紀末から8世紀初頭に位置づけられる。それに後出するもっとも出土量が多い、平遺跡2類・8葉

図4　平遺跡出土の軒平瓦（1）と隅切軒平瓦（2）

複弁蓮華文軒丸瓦と3類・13葉単弁蓮華文軒丸瓦は、美作国内に広がる平城宮系である軒丸瓦6225、軒平瓦6663系瓦の「美作系6225・6663型式」として、国府・国分寺の系譜下の瓦とされている（梶原2009）。妹尾氏は、平遺跡で出土する平城宮系の軒瓦は、美作国府・国分二寺で出土する軒丸瓦Ⅰ型式A・Bと軒平瓦Ⅰ型式A・B・C・E（津山市教育委員会1980・1983・1994）のなかで、軒丸瓦IBと軒平瓦IBにあたり、その生産は国分二寺の造瓦組織によってなされた可能性が高く、国衙との結びつきが強いとみる（妹尾2002）。軒丸瓦IB（平遺跡の2類）は国分二寺の創建に用いられたものであるが、笵が摩耗している点から国分二寺の造営が進んだ時期とされる。妥当な見解である。

小結

平遺跡出土瓦は大きくみると、創建瓦（7世紀末から8世紀初頭）と奈良時代後半（8世紀後半）にまとめることができる。

創建瓦（7世紀末から8世紀初頭）は、1類・7葉複弁蓮華文軒丸瓦と広端面に沈線を引いた軒平瓦に、桶巻き作りの平瓦と無段式丸瓦からなる。

奈良時代後半（8世紀後半）の瓦は、2類・8葉複弁蓮華文軒丸瓦、3類・13葉単弁蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦、一枚作りの平瓦と有段式丸瓦である。葺かれた建物は不明だが、この時期の瓦の出土量が多い点からみて創建建物の補修用の差し替え瓦ではなく、別の建物造営用の可能性があり、平遺跡では複数の瓦葺建物が想定できる。

平遺跡の瓦葺建物の屋根景観については、隅切瓦の均整唐草文軒平瓦が出土している点から、奈良時代後半（8世紀後半）の建物は総瓦葺きとなる。一方、創建建物については隅切瓦を確認できておらず、創建期の丸瓦だけを完全には抽出できないために平瓦と丸瓦の量比も不明である。ただし、創建期の軒先瓦が軒丸瓦4点、軒平瓦2点と少ないのに対して桶巻き作り平瓦が破片数1077、個体数46.5と多く、軒先瓦と平瓦の量比からみて創建建物も総瓦葺きだったとみられる。

なお、美作国は和銅6年（713）に備前国から分国しており、それ以前、勝田郡は備前国に所属していた。瓦が7世紀末から8世紀初頭に遡る点から、分国前の備前国段階で郡衙（郡庁か）は瓦葺きであった可能性が高い。これは瓦の様式からみた年代であり、713年を降る可能性がないとは言い切れない。勝間田遺跡・平遺跡の創建年代については、この点が今後の課題である。

3　勝間田遺跡と平遺跡出土瓦の比較

(1) 瓦の組成

勝間田遺跡と平遺跡ではともに7世紀末から8世紀初頭に瓦葺建物が造営される。その一方で、軒先瓦や平瓦・丸瓦の組成が異なる（表1・3）。

・創建期の軒丸瓦でみると、平遺跡で出土しない勝間田遺跡2類の7葉複弁蓮華文（蓮子1＋6）が勝間田遺跡ではもっとも多く出土する。

・平遺跡では奈良時代後半の軒丸瓦が36点中32点を占め、圧倒的に多い。一方で、勝間田遺跡からは奈良時代後半の軒先瓦は出土せず、この時期の一枚作り平瓦と有段式丸瓦が少量出土しているだけである。

・勝間田遺跡では創建期とみられる桶巻作りの平瓦が破片数（278/327）、個体数（12.75/13.25）と主体を占める。それに対して、平遺跡では創建期の桶巻作り平瓦は、破片数（1077/1681）、個体数（46.5/67.75）となっており、大きく勝間田遺跡と比率が異なる。平

遺跡で出土する斜格子叩き平瓦のなかで格子の単位が大きなものが、勝間田遺跡で出土していない点も指摘できる。

勝間田遺跡から出土した瓦は500点ほどであった。量が少ない場合、周辺の寺院から二次的に持ち込まれ、屋根に葺かれたものではない場合も想定できる。しかし、勝間田遺跡では寺院建物が想定できる平遺跡とは、瓦の組成が異なる点が明らかになった。こうした両遺跡における瓦の組成の違いから、勝間田遺跡出土瓦は二次的に平遺跡から持ち込まれたものではなく、勝間田遺跡で建物に葺かれたとみるのが自然である。

(2) 瓦葺建物の変遷

両遺跡とも瓦葺建物の創建軒丸瓦が同笵であり、同じ叩き板を用いた桶巻作りの平瓦が主体となっている点からみると、ほぼ同時期の7世紀末から8世紀初頭にかけて瓦葺建物が造営された点が明らかになった[3]（図5）。

その後、8世紀後半には平遺跡では新たな瓦葺建物の造営が想定でき、勝間田遺跡では補修用として平瓦・丸瓦が差し替えられたと考えられる。

両遺跡については、これまで指摘されたよ

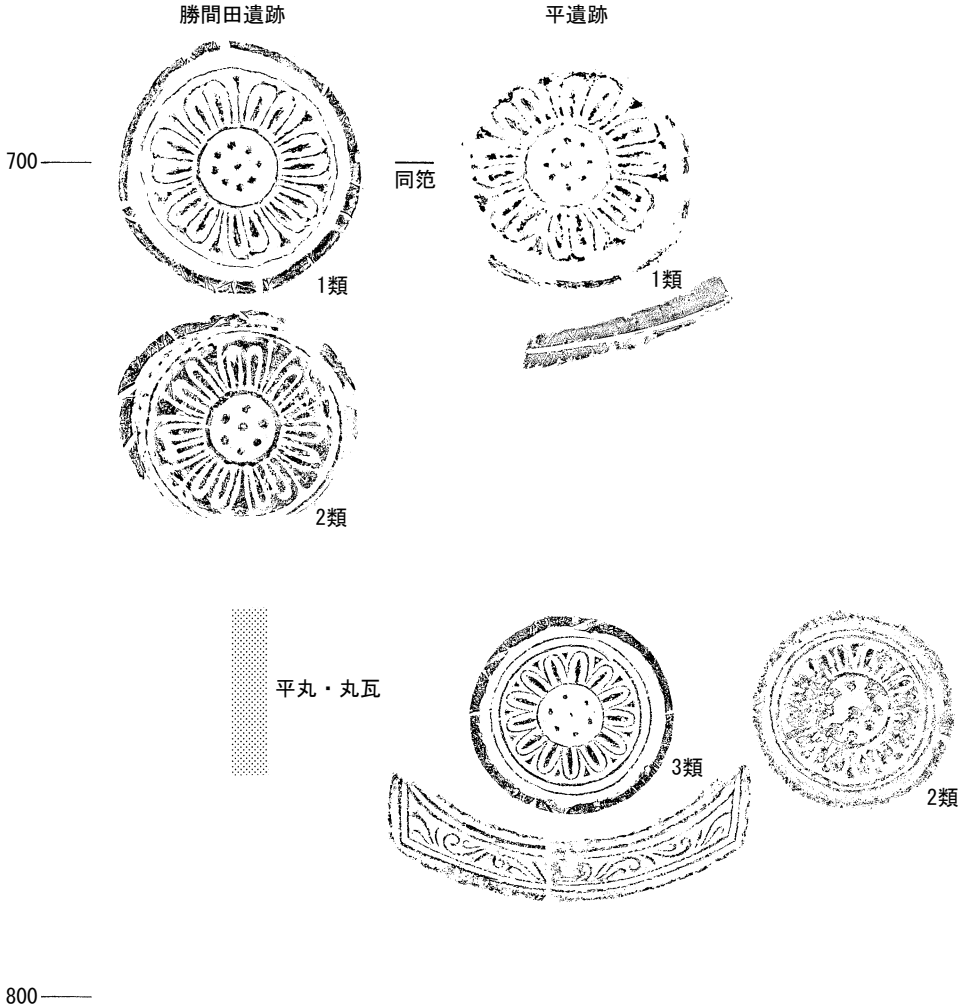

図5　勝間田遺跡と平遺跡の瓦（1/6）

うに勝間田遺跡は掘立柱式の長舎がＬ字に配置されており、郡庁とみられる。瓦は郡庁建物の甍棟として葺かれた可能性がある。一方、平遺跡では瓦葺建物はみつかっていないが、8世紀後半にも別の瓦葺建物が造営されているとみられ、複数の建物が瓦葺きであったとみられる。こうした状況は寺院を想定させる。『出雲国風土記』に載る新造院である来美廃寺や四王寺跡では7世紀末や8世紀前葉に金堂が創建された後、8世紀中葉以降に塔や講堂が新たに造営された（林2007)。郡衙に隣接して寺院が設置されるあり方は広く認められるもので、平遺跡から出土した瓦類は付近に寺があったことを推測させる。

平遺跡を含めて美作国府・国分寺と同笵の軒先瓦の生産にあたっては、国衙工房の関与が想定されてきた（妹尾2002)。賛同できる。郡衙である勝間田遺跡の瓦は、これまで軒先瓦から7世紀末から8世紀にかけてとみられてきた。加えて、今回の分析の結果、勝間田遺跡から軒先瓦は出土していないが、平瓦・丸瓦のなかに少量、奈良時代後半代の瓦が補修瓦として入っている点を確認した。平瓦からみて平遺跡所用瓦と同一の瓦窯から奈良時代後半に供給されたとみられる。したがって、勝間田遺跡では郡衙建物の補修用として、瓦が寺院（平遺跡）の整備期に国府・国分寺所用瓦を生産した同一の造瓦組織である国衙系瓦屋から供給されていたとみなせる。美作国において国衙系瓦屋が国府・国分寺だけでなく、国内の郡衙やその隣接寺院へも瓦を供給していた実態の一端をうかがうことができる。美作国において国府管轄下の国衙系瓦屋の製品が、郡衙や寺院に供給されたことを示すものとみられる。郡衙である勝間田遺跡に隣接した寺院（平遺跡）は瓦からみると、国の援助を受けており、奈良時代後半以降には国衙との結び付きが強い定額寺であった可能性も考慮すべきであろう。

Ⅲ　まとめ

7世紀末～8世紀初頭に遡る地方官衙である勝間田遺跡とそれに関わる平遺跡の瓦葺建物について検討した。ここで明らかになった成果と課題についてまとめておく。

・7世紀末から8世紀初頃に瓦が地方官衙で用いられる場合、国庁・郡庁の建物に多くは葺かれたとみられる。勝間田遺跡では瓦葺建物は明らかになっていないが、磚を確認した点からみると、郡庁（正殿か）に磚とともに瓦が用いられた可能性がある。

・これまで地方官衙創設期の瓦葺建物について、瓦の量が少ない点から総瓦葺きでなく甍棟が多いと推定してきた（大橋2010)。勝間田遺跡についても出土した瓦類の分析から、総瓦葺きではなく甍棟になる点を明らかにした。

・勝間田遺跡と平遺跡については、勝間田遺跡が郡衙（評衙）であり、それと隣接して寺院が平遺跡に設置されたと考えられていた（山中1994、湊1992)。瓦の分析からみて先後関係は明確ではなく、現状では7世紀後半から8世紀初頭にかけて、勝間田遺跡が郡衙（評衙）として成立し、ほぼ時期を同じくして寺院が北側の平遺跡に設置されたとみておく。すでに指摘されていた点であったが、瓦の具体的な分析によって裏付けられたと考える。勝間田遺跡で郡衙創設期に偉容を誇る瓦葺建物を造営し、隣接する平遺跡の寺院とともに地方支配の役割を担っていた点が明らかになった。

地方官衙出土瓦をみていくと、量が少なく官衙建物に葺いたとみていいのか判断に困ることが多い。東国の陸奥国とそれに接する下野国、常陸国の郡衙正倉のなかでみられるよ

うに大量の瓦が出土し、総瓦葺建物を想定できる例は少ない。寺院が近くにある場合には、瓦が二次的に持ち込まれた可能性も考慮する必要がある。こうした点でみると、郡庁とみられる勝間田遺跡とそれに隣接した寺院が想定される平遺跡では、分析の結果、軒先瓦や平瓦の組成に明確な違いがある事実を明らかにできた。勝間田遺跡出土瓦が平遺跡付近に想定できる寺院から二次的に持ち込まれたとみることはできない。これまでも勝間田遺跡では郡衙創設期に瓦が用いられたと想定されてきたが、瓦の組成から瓦葺建物の存在を明確に示すことができた点が成果である。

藤原京期から地方官衙でも瓦葺建物を採用する例が、全国的に数は少ないが認められる(志賀 2003、大橋 2010)。地方官衙から瓦が出土する場合、東国の一部を除くと多くは政庁(国庁・郡庁)とその周辺から出土する。この点からみて、まず地方官衙の建物で瓦を葺いて威容を示したのは政庁であったとみることができる。創設期の地方官衙遺跡では瓦の量が少ない例が多く、その要因の一つは屋根が総瓦葺きではなく甍棟が多いと想定している。今回の勝間田遺跡でも出土瓦すべてを検討した結果、甍棟だった可能性を指摘した。瓦葺建物の検討にあたっては、軒先瓦だけでなく平瓦・丸瓦を含めた総合的な分析が必要であることを示すことができた。

地方官衙の成立過程の究明は、古代国家による地方支配の実態を明らかにする上で重要な手がかりとなる。今回の分析の結果、勝間田遺跡において評・郡衙創設期に威容を誇る瓦葺建物が採用され、隣接して寺院が創建され、地域支配の拠点になっていた点が明確となった。さらに、奈良時代後半には郡衙とともに寺院が国衙と深い関わりのなかで整備が進んだことも明らかになった。ここで示した成果にみるように、地方支配の形成・整備過程を究明するために、今後、さらに広く地方官衙の高質化について検討を進めることが求められる。

註

(1) 勝間田遺跡・平遺跡出土瓦の分析には4日間を費やした。短期間だったために見落とした点も多いと思われる。今後の調査研究を期待したい。調査にあたっては、両遺跡の遺物を保管されている勝央町教育委員会・團正雄氏に多くの便宜を図っていただいた。

(2) 岡山県から広島県内に同種の軒平瓦がみられる点を、妹尾周三氏からご教示いただいた。

(3) 勝間田遺跡からカエリを持つ坏蓋(7世紀後半代か)を確認しており、土器からみても両遺跡の創設時期に大きな違いは認められない。

引用・参考文献

大橋泰夫 2010「地方官衙創設期の瓦葺建物について」『比較考古学の新地平』同成社

岡山県教育委員会 1974「勝間田遺跡緊急発掘調査概要」『岡山県埋蔵文化財報告』4

岡山県教育委員会 1975「平遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8

梶原義実 2009「山陽道・山陰道における平城宮系瓦の展開」『国分寺瓦の研究』(初出は 2005「山陽道・山陰道における平城宮系瓦の展開―6225・6663 系を中心として―」『考古学研究』52-1)

亀田修一 2009「中国地方の川原寺式・系軒瓦」『古代瓦研究』III、奈良文化財研究所

河本清・岡田博 1979「美作地方の官衙」『仏教芸術』124

河本清 1986「勝間田・平遺跡」『岡山県史』第18巻考古資料編、岡山県
河本清 1987「第7章古代第四節古代官衙」『岡山県の考古学』吉川弘文館
岡田博 1982「官衙」『吉備の考古学的研究・下』山陽新聞社
志賀　崇 2003「瓦葺建物の比率と時期」『古代の官衙遺跡』I、奈良文化財研究所
妹尾周三 2002「古代の仏堂と倉ー岡山県津山市で検出された大形建物の一解釈ー」『環瀬戸内海の考古学』古代吉備研究会
團正雄 2009「岡山県勝間田・平遺跡」『日本古代の郡衙遺跡』雄山閣
湊哲夫 1992『美作の白鳳寺院』津山郷土博物館特別展図録第5冊
湊哲夫 1995『美作国府跡ー埋もれた古代の役所ー』津山郷土博物館特別展図録第8冊
湊哲夫 2000『国分寺ー天平時代の国家と仏教ー』津山郷土博物館特別展図録第14冊
湊哲夫 2006「第3章第1節　美作」『吉備の古代寺院』吉備人出版
湊哲夫・亀田修一 2006『吉備の古代寺院』吉備人出版
津山市教育委員会 1980『美作国分寺跡発掘調査報告』
津山市教育委員会 1983『美作国分尼寺跡発掘調査報告』
津山市教育委員会 1994『美作国府跡』
林健亮 2007「出土遺物の検討」『史跡山代郷北新造院跡』島根県教育委員会
山中敏史 1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房
山中敏史 2000「磐城郡衙の発掘調査成果における若干の問題」『根岸遺跡』いわき市教育委員会

図版典拠

図1・3〜5：大橋作成、図2：團 2009 より